

物流や文化の町として栄えた「小垣江」

5月9日小垣江市民館の駐車場に集まった20名余の参加者は、刈谷ふるさとガイドボランティアの会の案内で、北と南の土場を中心に小垣江を2時間30分かけて回りました。

「清水土場跡」と小垣江の由来

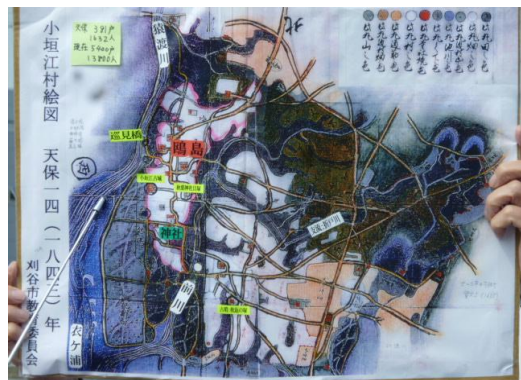
平成大橋を渡って右折し、しばらく走り金毘羅神社前の信号を左折。すぐの橋を渡ると広場があり小垣江市民館の駐車場に着く。かなりの広さがあり、どんな催しにも対応できそうである。

今回のコースは清水土場跡---小垣江神明神社---誓満寺---北浦・半埼玉場跡---巡見橋---秋葉神社貝塚---小垣江駅---曙庵と巡る。

駐車場の隣の橋が前川にかかるかもめ橋、そこから下流に向かって清水土場跡。江戸時代にはいくつかの蔵が立ち並んでいたと言う。天保14年(1843)の小垣江は381戸・1632人だった、今は5,400戸・13,800人の街。当時の地図で説明してくれたが、それによるとこの辺りは猿渡川・衣ヶ浦と前川に挟まれた島で、鷗島と呼ばれていた。



清水土場の説明



天保14年の絵図

橋の名前も「かもめばし」で欄干にはかもめが飛ぶ様子が描かれている。その隣には村の名前の由来が掲げられている、そこには古説として孝元天皇が伊勢へ向かう時に迷い込み、

鷗が波に浮き沈みして尾が隠れ「尾ヶ消」村と称した、後にこれが「小垣江村」に改めたと
言い伝えられている。

通る街道は大浜街道で橋のたもとに道しるべのお地蔵さんがある、刈谷には道しるべ
のお地蔵さんが 33 体あり、そのうち 18 体が小垣江にあるそうだ。数が多いのは大浜街
道が通っていることによるものと思う。ガイドの方の案内は全員をまとめて一人が行う
ので、立つ位置によって話がよく聞けなかったりする。ガイドは 3 人いたが、どうやら
地元ガイドさんが中心に説明する段取りのようだ。私としては、せめて 2 班に分けて
説明してほしかった.....

神明神社と小垣江の由来

次に向かったのは「神明神社」、ここは一度訪れたことがあるものの記録を残さなかつ
たので何も記憶にない。入口の「神明神社」と彫られた大きな石柱の手前に、少し小ぶり
の石柱がある、そこには「昇級十周年記念」とある。それだけでは分からないが、昭和三
十何年の時に 25 万円の上納金を納めて、それまで 9 等級だった社格が 7 等級になった
記念という。ちなみに刈谷では野田八幡社の 5 級が一番上の社格だそうだ。



神明神社



今回歩いたエリア

先日のガイド研修会でも話題になった社格については、お金が大きく左右するらしい。
もちろん基準があり、境内の広さ・氏子の数などもろもろのことから決められるとのこ
とだった。でも、やはりお金がものを言うのが現実かなと思った。

鳥居をくぐるとまっすぐに延びた参道は、両側に立派な常夜灯がある。それには「江
戸麻布十番 林田小右衛門 当村畑中 久兵衛」と刻まれている。そこから延びる参道

には桜の木をはじめとした緑が続いている。広い境内にはいくつかの神社が合祀されているほかに、忠魂碑もある。日清日露と太平洋戦争の従軍者と戦死者の名前が刻まれ祀られているが、「清水」の名字が一番多いと言う。

刈谷市教育委員会の説明板があり、それには神明神社が村の鎮守であることと、小垣江の名の由来について書かれていた。先ほどのかもめ橋のところの説明とは異なり、日本武尊が熱田に向かうおり間違っ三河湾に入り、この辺りが神の御垣の入江のようであったことが「御垣江」の地名の起りといわれている...と記されている。いずれにしてもよく分からないが、もっともらしい話である。

神仏混合のお寺

次は大浜街道を北へ向かい誓満寺を訪ねる、立派な山門は乾坤院のものより大きなものでここも補強の張りがしてある。山門の手前には赤い鳥居がある、山門のところで敷地の線引きがあるということらしい。教育委員会の説明では、この寺は永正年中(1504～1520)戦に敗れた永沢一族が、砦の跡へ村にあったお堂を移して法栄寺と号し、一族の冥福を祈ったのが寺の始まりという。承応元年(1652)尾張建中寺の末寺となり、浄土宗に改宗して誓満寺と改めた。貞享2年(1685)刈谷藩主稲垣重明の寄進により、誓満寺の鎮守富士塚社として勧請された浅間神社が合祀されている。

にぎわった北浦土場と巡見橋



北浦土場



そばに常夜灯

次は 10 分程歩いて猿渡川沿いに出る、道路には大きな常夜灯があり集落の外れであ

ることと、港の灯台であったことが分かる。堤防から見ると葦が茂る中に小さな入り江があって石垣が残っている。ここが北浦土場で、そこから少し先に半崎土場がある。この辺りは瓦の生産が盛んであり、ここの土場からは主に瓦を積みだした。降ろした荷は瓦の粘土や燃料の薪、それに耕作用に灰をたくさん降ろしたという。特に灰を扱う問屋はいくつかあって、荷降ろしの際は道が占領されてしまい地元の人たちが困ってしまった。そのために問屋は地元の人には、儲けなしで灰を売ったという。

それほどにぎわったと言うことで、この辺りの物流の拠点であった。それに、お伊勢参りの船もここから出たと言う、もちろん直接大きな船が入ったのではなく、沖で乗り換えたものらしい。

現在の地形からはとても想像できないが、ここまで船が出入りして物流の主役であった時代が間違いなく存在した、そんな昔に思いをはせるのも楽しい。



北浦土場のすぐ先に巡見橋がある。江戸時代は将軍が変わると各地の調査が行われており、天領と旗本領地を観察する御料巡見使と諸般の大名を観察する諸国巡見使があった。この地区では刈谷藩がこの橋までを、橋から南は福島藩が治めていた。当時は重原に陣屋があり、ここは福島藩の飛び地だったことから、この橋のところで藩の役人が巡見使を送り、また迎えたと言う。巡見使は10万石級の大名家が当たっており、岡崎でさえ5万石であり2万石か3万石の刈谷藩等は、大変気を使って対応したと言う。その巡見使が視察を終えて、次の地区に送るのがこの橋だった。そのため

橋には巡見使のレリーフがある。

教育委員会と郷土歴史研究会の二つの説明板

巡見橋から観音寺をぬけて今度は南へ20分ほど歩く、少し疲れ気味になるころ秋葉神社貝塚に着く。ここには市教育委員会の説明板と、地元の郷土歴史研究会の説明板が設置されている。この秋葉神社は地元では、以前あった「県社(あがたしゃ)」から「おわがた・おわがたさん」と呼ばれて親しまれている。

境内に広がる貝塚は衣浦湾にそそぐ猿渡川左岸の台地上に分布しており、平安時代前期に(9世紀後半)この場所で生活を営んだ跡が認められるという。カキ、ハイガイなど

貝類のほかには椀や製塩土器も出土している。それに加えてモミも見つかり田を作っていたことがうかがえるとはガイドさんの話。しかし、どちらの説明板にも「モミ」のことは載っていない。ちょっとした広場と木陰を作る木々もあり、今は子供たちの格好の遊び場になっているようだった。



秋葉神社貝塚



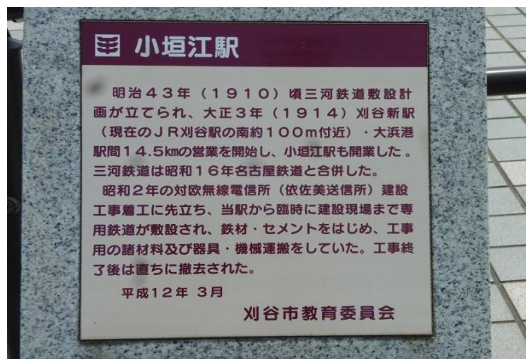
前川沿いの花壇

そこから5分程行くとスタート地点を流れていた前川にぶつかる。手前に公園があり立派な湯揚橋が架かっている。昔はこの橋の場所に堰があり、水田に水を送っていたのだと言う。当時の写真を見せていただくと、立派な設備があったことが分かる。今は堰から水を流す水路は暗渠になっており、その上は地域のみなさんが管理する花壇になっていた。川沿いにたくさんの花がきれいに咲いており、楽しい散策路ができていた。

依佐美の無線塔建設は小垣江駅から始まった

堰の跡から2分程で名鉄三河線の小垣江駅に着く、何故かそこにも教育委員会の説明板があった。そこには三河線の歴史と、その中でも依佐美の無線塔建設のことが書かれていた。三河線は大正3年(1914)刈谷新駅(現在のJR刈谷駅の南100m付近)と大浜港駅間4.5kmの営業を開始し、小垣江駅も開業した。そして、昭和2年の対欧無線電信所(依佐美の無線塔)の建設に先立ち、資材運搬のためにここ小垣江駅から建設現場まで専用鉄道が施設された。しかし、鉄道利用は2カ月の限定許可しかなく工事終了後には直ちに撤去されたという。小垣江駅にそんな歴史があったとは初めて知った。

こざれいになり無人駅となった西側には自転車置き場が、駅の東側にはとても広い口



小垣江駅と説明碑

一タリーが整備されている。でも駐車スペースは作られていない。こんなに広いのなら駐車スペースがあってもよさそうなものだ。

駅から少し歩くとお城を思わせるような家が現れる、「曙庵跡」で俳人の「中島しゅうきよ」という人が活動した場所と言う。今は山車の修理などをする「大鉄」という大工さんが管理しているとか...

これらの詳しいことは資料がないと分からない、一度聞いただけではその場で忘れてしまう。簡単なもので良いから資料がいただけたらと思う。

この場所は最初に集まった駐車場のすぐ向かいで、そのあと会から連絡などがあって解散した。